人間と文化

――『六合雑誌』における内ケ崎作三郎――

竹中正夫

経　歴
『六合雑誌』への寄稿
宗教思想
　生命の宗教
　ベルグソンとの出会い
　宗教協力について
芸術論
教育論
　教育と社会
　新大学令の批判
　私立大学の保護
婦人問題
国際平和論
仙台の友人たち

経　歴

内ケ崎作三郎（一八七七―一九四七）は、宮城県出身の教育者であり、早稲田大学教授をつとめたのち、大正一三（一九二四）年には代議士となり、いらい当選七回、民政党総務、文部政務次官などをつとめ、昭和一六（一九四一）年には衆議院副議長に選ばれるなど、その後半生は政治の領域において活躍した。

もともと内ケ崎は、仙台の第二高等学校で学び、キリスト教に触発され、東京帝大文科大学に進んで英文学を専攻し、早稲田大学では文明史および文化史を講ずるなど、きわめて幅ひろい教育を身につけていた。さらに、明治四一年から三年にわたって渡欧し、主として、英国オックスフォード大学のマンスフィールド・カレッジで西洋の近代思想、なかんずく、キリスト教思想について学ぶとともに、ヨーロッパ各地をつぶさに訪問して、キリスト教文化についての視野を広めかつ深めていった。

かれは、仙台時代にキリスト教に関心をもつ様になり、バプテスト系の宣教師ブゼル女史の聖書研究会に吉野作造、小山東助などと共に出席し、吉野と共に受洗した。東京に出て、東大基督教青年会の寮に入り、キリスト教を中心にした共同生活によって培われるとともに、海老名弾正の牧する本郷教会に出席し啓発されるところが少なくなかった。

英国留学後は、ユニテリアンのグループである統一教会（明治四五年一月成立）の指導者となり、大正四年五月二三日かれは神田錦町二丁目女子音楽学校の講堂を借りて自由基督教会の礼拝をはじめ、内ケ崎はその講壇を担当した。同時に『六合雑誌』の編集にも与り、明治四四年から大正九年にわたっては、ほとんど毎号のように健筆をふるい、

『六合雑誌』の紙面を該博な知識と豊かな文化的教養や信仰論をもって賑わした。

『六合雑誌』への寄稿

この期間（明治四四年―大正九年）における『六合雑誌』に寄稿した内ケ崎の文章はその量においては尨大な分量にわたり、文学、絵画、哲学、宗教、教育、社会、経済、政治の各領域にわたってきわめて広範なひろがりをもっている。その点数を数えると約一八〇点の論文と約三〇〇首をこえる和歌を寄稿している。内ケ崎がいかに精力的に『六合雑誌』にかかわっていたかを如実に物語っている。この時代において、かれは『六合雑誌』の主要な推進者であり、彼は、『六合雑誌』とともにあり、『六合雑誌』は彼によって代表されていたといっても過言ではない。これらの多岐にわたる内ケ崎の尨大な論稿について詳述することは出来ないので、本稿では、宗教思想、芸術論、教育論、婦人問題、国際平和論、交友録などに分けてその主な傾向と性格を検討してみたいと思う。

宗教思想

この期間に内ケ崎が『六合雑誌』に寄せた論文のなかで、最も多くを占めているのが、宗教思想に関するものである。その論文の数は七四点に及び、この期間に内ケ崎が寄稿した論文の約半分を占めている。内ケ崎は、『六合雑誌』の「教壇」「社説」でしばしば宗教思想を論述しているのみでなく、先述のように自由基督教会や統一教会で礼拝説教を担当しており、その説教の記録を『六合雑誌』に掲載している。

内ケ崎の宗教思想に関する論稿は多岐にわたっており、自己の信奉する自由基督教の立場を解明するものから、海

外の宗教事情の紹介や、わが国の宗教政策の批判、さらに、エキュメニカルな他教派、宗派との提携を論ずるものなど広範な領域にわたっている。

生命の宗教

内ケ崎は明治四一年に渡英し、約三年間オックスフォード大学のマンスフィールド・カレッジで思想史を研究し、帰国後再び、早稲田大学で教鞭をとるようになった。彼は英国に出立する前、明治四一年夏に惟一館で講演をなした。それが、『六合雑誌』（第三三八号、明治四二年二月）に「神と人」という題で掲載されている。この論文のなかには、内ケ崎の神観と人間観がよく表明されている。それは、その後の彼の宗教思想がそれを基盤として発展していったとみることが出来る。内ケ崎は神の性質について、つぎの四点をあげている。第一は、神の永遠性である。第二は、神の支配する宇宙の無限性であり、第三は、その宇宙は美なる宇宙であり、そして、第四に、宇宙の神は同時に倫理的な神であり、天道を備えし愛と正義、平和と博愛を志向する神であると説いている。ナザレのイエスの存在も、内ケ崎にとっては、きわめて倫理的なもので、愛、正義、平和といった倫理的価値を具現したものとみなしている。ここでいわれている神観は、創造の神に中心をおいた普遍的な汎神論的な色彩が強く、キリスト論には贖罪的な性格や、神的な要素は少なく、むしろ、倫理的価値を具現した人間的要素が強調されている。のちに、内ケ崎が英国に赴き、ベルグソンに接し、生命の哲学に共鳴する素地がここにみられる。

同じ論文で展開されている人間観をみると、進化論的に人間の生成発展をとらえ、肉体の発達とともに、品性の発達をめざし、修養と努力をもって人格の完成に至るものとして人間をとらえている。きわめて合理的にして、倫理的

な人間観である。その結びのことばは、彼の主張をよくあらわしている。

吾々の魂は之を研き之を鍛へるなら永遠より永遠に亘る宇宙の大を支配し霊を宿すことが出来る。吾々の信念を深くし日夜勤めて倦まざれば吾々の魂は向上することが出来る。膨張することも出来る。而して日本国民も此の神の恩恵によつて、人間の努力によつて、大いなる思想、大いなる文学、大いなる発明、大いなる事業が出来、人類共同の事業の為に貢献することが出来ると信ずるものである。（三三八号、一〇五ページ）

内ケ崎は、三年の英国留学を終えて帰国し、早稲田大学で教鞭をとるかたわら、東京芝の惟一館で開かれたユニテリアン教会の集会で屢々説教を担当していた。明治四四（一九一一）年九月二四日から二回にわたって「我が信仰の告白」と題して自己の信仰を表明し、『六合雑誌』第三六九号と第三七〇号に連載している。このなかで、彼は、自己の神観と、キリスト論をのべている。そこにおける神観はきわめて、内在的であり、霊感的なものである。彼は有神論の証拠は何れに在りやと自問し、「人間の意識の中にある」と答え、「其神秘なる意識は神の光である」（三六九号、四五五ページ）とのべている。内ケ崎は神の不断の創造の働きを信じ、「神は宇宙を創造しつゝあるのである。神の創造は現在である。即ち、それは過去より現在に亘つて将来に及ぶ所の意識の運動が歴史の中に存在している道理である。」（同上、四五六ページ）とのべている。創造の出来事は過去の一回かぎりの出来事でなく、現在も継続して行われている自由な神の働きであると考えている。それ故、内ケ崎にとっては、人間は神の中に生息しており、あたかも、魚が水から飛び出せば死んでしまうように、人間は神から離れることは出来ない存在であるとしている。彼にとっては、「自由なる神が宇宙を創造しつゝあるから一瞬一刻は驚異の連続である。」（同上、四五七ページ）、神の創造的絵巻物に応答するのが人間の宗教心であるとのべ、あたかも芸術家が宇宙に躍動する美の働きに感動し応答するよ

うに、信仰者は、宇宙にくり広げられている生命の創造的な働きに感動し応答するというのである。のちにのべるように、内ケ崎において、宗教と芸術はきわめて密接な関係にあることが理解されると思う。

右の内在的な神観に即応して、内ケ崎のキリスト論には、超越的性格は少なく、ナザレのイエスという歴史的人物として把握している。「イエスは、神であり、救主である」という正統的信仰の告白を内ケ崎はとらない。彼によるならば、イエスは、大人格者であり、超自然的人物ではなく歴史的人物であり、その感化と教訓によって基督教という霊的運動がはじめられたとみなすのである。厳密にいうなら、内ケ崎には、「キリスト論」はなく「イエス観」があるといっても差し支えない。人間は、生命の源泉をあらわした比類なき大人格者であるイエスを指標とし、彼に従って歩むとき、利己心を抑え、情慾にうち克って精進することが出来るのであって、その意味において、イエスは救主である。内ケ崎はこうのべている。

イエスは歴史に比類なき空前の大人格である。彼の此世に生れたるは、神の慈愛の示現である。我等日常の生活に彼の言行を繰り返さんと努力する時、我等は奮然として利己心を抑え、情慾に克ち、聖なる思ひに充たされて精進邁往することが出来る。我等を仰いで、狭い小我を棄てゝ、実在の根源たる創造しつゝある神霊の中に没入することが出来る。此意味に於て、我等は彼に救主たるの名を捧ぐるに躊躇しない。（同上、五〇五ページ）

ベルグソンとの出会い

内ケ崎は、英国滞在中、明治四四年五月、オックスフォードでベルグソンの講演をきき、感銘をうけて、一文を草している。『六合雑誌』第三八〇号に掲載されている「ベルグソン哲学と基督教」という一文がそれである。オックスフォードにおける講演はきわめて盛会で、約三〇〇人の人々が彼の話に耳を傾け、ベルグソンは「変化の観念」につ

いて講演した。内ケ崎に、「余が其の時見たる彼（ベルグソン）の体躯は痩せて、小さく、恰かも蕭洒たる神僧のやうであつた。彼の仏蘭西語は、さながら銀鈴を鳴らするが如く施律的であつた」と印象を記している。（同上、一九〇一ページ）

内ケ崎はベルグソンに出あうことによって、従来から抱いていた宇宙に働く創造的生命力に対する理解を一層深めていった。当時、オックスフォードにて哲学、神学の領域で教鞭をとっていたジャックス教授やヒックス教授はともにベルグソンに関心をよせ、三年に一回開かれる英国のユニテリアン系の教会の大会で、二人ともベルグソン紹介の講演をなしており、両名に師事した内ケ崎に対するベルグソンの影響は少なくなかったと思う。

内ケ崎は、ベルグソンの哲学のキリスト教に対する影響としてつぎの五つの点をあげている。

㈠各個人が生命力を有し、㈡それは意識を媒介として創造的に発展する。㈢宇宙の自由な創造観から開かれた未来と発展と向上をとらえ、㈣宇宙の終極に対する期待を説き、㈤人間は神から出たもので、永劫不尽の生命である神の流れに生くるものであるとする点をあげている。なお、ベルグソンについては、『六合雑誌』の同じ号に三並良が「ベルグソンと独乙哲学」と題して一論を寄せており、ベルグソンの影響が当時の『六合雑誌』に大きかったことを示している。

宗教協力について

内ケ崎の属するユニテリアン教会は、自由主義の流れをくみ、幅ひろい宗教協力の態度をとっていた。それを反映して、「日本基督教同盟に対する吾人の態度」（三七三号）、「福音主義者の矛盾」（三八八号）、「宗教の公同性」（一〇〇号）「最近精神界運動の批判」（四三一号）などで、偏狭な基督教会の態度を批判し、「多くの伝道者は、或る宗派の内部に

のみ閉ぢ篭つて、他の大宗教の空気に触れず、往々にして識者を心服せしむる能はざる議論を公にすることがある」（第四三一号、五ページ）とのべ、諸宗教が包容力をもって、一致協力し、長短相補って人道に対する貢献をなすように切望している。

内ケ崎は、渡英前は、海老名弾正の牧会する本郷教会に属していた。英国では、内ケ崎は、ユニテリアンの人びとが後援するマンチェスター・カレッジで学び、他宗教に対して抱擁力のある寛容の精神を学んだ。因みに、有名な『ヒバード・ジャーナル』は、ユニテリアンの商人であるロバート・ヒバードの寄附金によって始められたもので、マンチェスター・カレッジにその編集局があり、同カレッジのジャックス教授が主筆をつとめていたもので、日本組合基督教会の機関紙『基督教世界』にはほとんど毎号『ヒバード・ジャーナル』所載の論文が訳出紹介されていた。内ケ崎は、それぞれのキリスト教会のなかには、或種の福音が含まれており、互いに自分の福音を表明しているもので、自分の福音主義に立脚するとともに、他の教会の福音主義に対する理解を失わず、それぞれの特色を認めあった上で協力一致をすべきことを主張している。

吾人は孤立を欲せない、日本精神界多事にして協力を要すること多し。吾人の統一は各派特長を残留しつゝ、大目的に於て一致することである。猶歩兵、砲兵、騎兵、輜重、看護等の区別はあれども、同一軍人会の下に運動する軍隊のごとき一致を希望するものである。他の凡てを排して、悉く騎兵なれ、若くは歩兵たれよといふのではない。（三七三号、一九五ページ）

この外、内ケ崎の宗教論において注目すべきことは、「内務省の宗教政策」（三七三号）にあるように、国家の宗教政策を論じているものがある。彼は、明治いらい国がとって来た宗教政策を瞥見したのち、内務省が、明治四五年にすすめた三教会同に触れている。内ケ崎は、当時内務次官をつとめていた床次竹二郎の宗教に対する考え方を支持

し宗教家の寛容な態度が要求されていることをのべ、今後の問題はむしろ、文部省であり、文部省が国民道徳の基礎をいかにとらえるかということにかかっていると主張している（同号、一八九ページ）。

内ケ崎は、西欧の自由主義的哲学、神学の影響を多分にうけ、人格や自然に対する態度を表明していることが多いが、東洋の一角を占める日本人として基督教をとらえ、かつ、東西文明の調和交流に寄与しようとしている。彼は、ナザレのイエスは、ヨーロッパ生れでも、アメリカ生れでもなく、アジアの一角に生れた人であることを力説し、「アジアの長所は、宗教的天才を産出する所にある」（三七四号、二七ページ）とのべ、イエスの生涯における東洋的要素をあげ、基督教を媒介にした東西両文明の調和を志向している。

さらに、「欧米に於ける祖先紀念の風習」（三七三号）という社説においては、明治四四年、大逆事件など一連の出来事の反応として、祖先崇拝復興の運動が教育、宗教界におこって来たのに対して、欧米ではどのように祖先を紀念しているかを紹介している。ここで注目すべきことは、内ケ崎が祖先の紀念といい、崇拝といっていないことである。彼は、祖先を紀念することは、当然すべき人間のつとめであるとし、敢てそれを宗教的行事として国民に強制することには反対している。彼はこうのべる。

> 日本の神社は、宗教の機関にあらずして、祖先崇拝の場所に過ぎぬ。然らば、神社を選択して、歴史的人物を祭れるものを指定し、これを、県、郡、村の直接管理の下に置き、神主との関係を絶ち、迷信の聯想を断ち純乎たる祖先崇敬の地となさば、基督教者も敢て之を批難はせぬことと思ふ。地方によりては小学校教師が生徒を引率して、強制的に崇拝を強ゐたる処もありたる由なれば、これに反抗の声の挙りしも無理ならぬことである。（三七三号、九ページ）

彼は、このように、神道による祖先の崇拝に反対し、宗教的な色彩をもたない祖先の紀念を考え、キリスト者もそ

れを実行すべきことを説いた。神社は宗教の機関ではないとする内ケ崎の神道理解は、神道を神社神道と宗派神道に分離して、結局は臣民の道といった形で国家主義的神道思想を強化したのちの日本の宗教政策から考えると問題を覚えるが、神道から断絶した形で祖先の紀念を行なえという内ケ崎の考えは興味あるものであり、今日の靖国神社をめぐる問題に示唆を与えている。

芸術論

内ケ崎は、近代の宗教思想に精通していたが、もともとは、東京大学において英文学を専攻した背景をもっており『六合雑誌』にも多くの和歌を寄稿しているのみでなく、詩人タゴールの紹介（四一四号）や「宗教生活の芸術的内容」（三七一号）や「現代英文学の宗教的情調」（三八八号）、さらに「真と美と生命」（三九二号）など、文学、芸術に関する論稿を寄せている。また、第三七二号（明治四五年一月）から『六合雑誌』の口絵解題を担当し、第三八七号に及んでいる。このなかで、彼は「ラスキンの碑」（三七八号）について説明し、「バートロメーの宗教的大芸術」（三八〇号）や「ミケランゼローの瞑想の人」（三八二号）を紹介している。内ケ崎の芸術論のうちで、彼が力をいれて書いているのは、「戦争画家ウエレスチヤーギン」（四〇八号）と題する評伝である。これは、内ケ崎が、外遊中（明治四二年ごろ）モスクワをたずね、トレッエコーフの美術館でウエレスチャーギンの作品をみたときの印象を克明にえがいたものである。内ケ崎がとくに心ひかれたのはウエレスチャーギンの一連の戦争画であった。同じ戦争画でもウエレスチャーギンは華やかな勝利の栄光を描いたのではなく、戦争の苦痛と悲哀とをひたすらに描いた画家であった。彼は自ら戦争に従軍し、最後は日露戦争のとき、旅順港外で死んだ悲劇の作家であった。彼は戦争がいかに悲惨なものであるか

をつぶさに描くことによって、戦争を廃止させようとして、ちょうどピカソが無差別爆撃をうけたゲルニカを描いて残酷な戦争にプロテストしたのに対比して考えることが出来る。

ウエレスチャーギンは一八四二年にロシアの中流の地主の子として生れ、幼いころから絵を好み、画かきとなることを志したが、父は軍人になるようにすすめ、海軍兵学校に学ぶようになり、その傍ら絵の勉強をつづけた。一七歳のとき軍籍を脱し、画家となることを志し、アテネに赴いて古代ギリシャの大理石像により、写実的手法を学んだ。一八七三年、英国に赴いて、英国の支配下にあえぐ印度人の姿を現実的にえがいた。なかには、英兵が印度人にむかって発砲している様子をえがいたものがあった。これは、英国人にあまり歓迎されなかった。これに対して、ウエレスチャーギンはつぎのようにいった。

> 印度人は英人の為めに絞殺せられ、若しくは銃殺せらるゝことを恐れない。されども、大砲弾にあたりて四肢五体が切断せらるゝを非常に恐れてゐる。何となれば、かくする時は、彼等は天国にて蘇ることを得ずと信ずるからである。けれども六万の銃剣を以て二億五千万の人民を服従せしむるには之も止むを得ざることであろうと。（同上、八ページ）

彼は、戦争に従軍し、つぶさに凍死者や負傷兵や、沈没しつつある軍艦と溺死する人々などをリアルに描いた。砲弾と銃剣のもとに人間の肉がさかれ、血が流れ、悪疫が蔓延し、最後の瞥見を天において死んでいった兵士たちを、一群の鵜がどん慾に襲いかかっているさまなど、戦争の惨状をあばくかのように描いた。彼の絵は王侯貴族や、為政者たちの諷刺画であり、戦争に対する反抗の叫び声であった。それ故、彼の絵の色彩刷は発売禁止になったといわれている。内ケ崎がとくに、平和主義に立って戦争の惨状を写実的に描いた、ウエレスチャーギンの紹介を克明にしていることに注目すべきである。

教育論

内ケ崎が『六合雑誌』に寄稿した広範な領域にわたる論稿のうちで、教育問題にかかわるものが一五点ある。これらを大別すると、つぎの三つに分けられる。一つは、社会形成の基盤として教育問題を論じたもの、第二のものは、政府が試みようとした教育政策に対する批判、第三は、女子教育ならびに婦人問題に関連して教育を論じたものである。いまこれらについて、逐次検討してみることにする。

教育と社会

内ケ崎は、大正八（一九一九）年「帝国憲法」発布三十周年を迎え、『六合雑誌』に「民本主義の教育的宗教的社会的基礎」という一文をのせている（四五八号）。

内ケ崎は、この論文において、日本憲法は君主統治の憲法であるのみでなく欽定憲法であるが、憲法発布の勅語は「朕が親愛するところの臣民は、即ち朕祖宗の恵撫慈養し給はりし所の臣民なるを念ひその康福を増進しその懿徳良能を発達せしめん事を願ひ、又其翼賛に依り与に倶に国家の進運を扶持せんことを望み云々」と記されているので、「帝国憲法」の精神に、天皇が臣民の品性と智能とを協力することに依って有終の美を済すことが出来るとのべ、形式においては君主統治の憲法であるが、内容においては、君臣同治の憲法である資格をもつものであるとのべている（同上、二―三ページ）。

帝国憲法の内容を君臣同治とみなそうとする内ケ崎の考え方には多少無理があると思われるが、その内容を出来る

だけ民主的に解釈し、運用をはかろうとするところに彼の意図のあったことは理解されよう。

当時、デモクラシーを鼓吹していた吉野作造は、内ケ崎の二高時代からの親友の一人であり、内ケ崎はその影響もうけて、民本主義の社会実現のために教育の果すべき役割を論じている。内ケ崎は、民本主義（デモクラシー）と乱民主義（モブクラシー）を区別する。彼は、「真正なる民本主義はあらゆる人をして、最高品性を発揮せしめ、最高能力を発揮するに存する」と規定し、ただ単に民衆に自由を与えたら自動的に民本主義が形成されるものではないととく。彼は、アブラハム・リンカーンの「人民による、人民のための、人民の政治」という民本主義の定義よりも、イタリアの建国三傑の一人としていわれているマッヂーニーの言葉である「最善、最賢の人士の指導の下に一切人民に依つて一切人民の進歩」という表現に賛成をする。すべての人を画一的に同一化するのではなく、それだけの人の個性を尊重して、あらゆる人の最高品性を発揮させることをもって、民本主義の目標とする。民本主義（デモクラシー）が乱民主義（モブクラシー）に陥らないためには教育が必要であるとする。「教育なきデモクラシーはモブクラシーとなる杞憂なしに非ず」（同上、四ページ）というのが内ケ崎の持論である。

内ケ崎は近代のヨーロッパの国々における民本主義の育成は、教育の普及と正比例していることを、オランダ、ペルシャ、スイス、フランス、英国などの国々における数字をあげて実証している。すなわち、オランダにおいては、普通教育は一八〇一年から布かれ、一八七八年から義務教育制が行われたことを指摘している。英国においては、普通教育をうけるものは、人口の半分にすぎなかったが、一八六七年に選挙権が拡張されるに及んで、教育の改善が促進されたことをのべ教育が普及していないが故に普通選挙権を与えることが出来ないとする考えがいかに短見であるかと語っている（同上、五ページ）。さらに、米国においては、一八九七年から八年にあたる年度において、小学校に出

席しているものは、全人口の約二割であった。一九〇九年においては、小学校に学籍を有するものは一、七〇〇万余で、一日平均の出席者は、一、二〇〇万人を数え、その教師数は約四九万六、〇〇〇余人にのぼり、大学、専門学校における学生総数男子二〇万四、〇〇〇余名、女子約七万六、〇〇〇人、一九一五年度における米国の教育費総額は約一〇億万円に達することを指摘し、いかに教育が普及しているかをのべ、これが民本主義の発展の基盤となっていると主張している（五ページ）。

大正八年七月、内ケ崎は『六合雑誌』の第四六二号に「唯物的教育の破産の一例としての大犯罪」という論文を発表している。これは、当時東京帝国大学を卒業した二人の官吏が、数万円の利慾に眩惑されて人を殺害した事件をとりあげたものである。こうした事件がおきたのは、いかに最高学府のすぐれた教育を経たものであっても、人間としての根本的な問題を閑却した教育をうけた結果、こうした悲劇がおきたものであるとみなしている。内ケ崎によるならば昔から東西の聖賢が、沈思瞑想し、難行苦行して欲望を抑制し、霊性を深め、人間の救いと人格の育成に尽力した。それに反して、近代になってからの日本の教育は、「形式教育、国家万能教育に走り、単に学校の建築、設備、教師及び学生の服装の統一等に重きを置き、精神的訓練の道は甚だしく閑却せられた。」さらに、文部省が、宗教と教育を分離するため、人間の形成はおろそかにされたことを指摘しつぎのようにいっている。

聖賢の道は自ら敬遠せられて、動もすれば、侵略的帝国主義を助長する所謂国民道徳なるもののみが力説された。而して浅薄なる科学的知識が同時に鼓吹せられた。夫れ科学は経験を重んずるものである。科学は権威を認めない。故に、科学的精神は進歩的である。然るに、所謂国民道徳なるものは、権威に立脚して、動もすれば、経験を軽んずるの傾きがある。云ふまでもなく、青年学生に、修身倫理の時間と数学物理化学等の時間との間に何等の内面的連絡を発見することが出来ない。（同上、三ページ）

こうした基本的な倫理的価値観の欠如しているところに、物質文明の影響によって個人の私利私慾をのみ追う傾向

が強くなり、俸給によってはさして豊かな生活をすることの出来ない官吏は、富家の娘を妻とし、才幹を用いて、御用商人と結托して、私腹をこやし、慾に走り、ついに関係した商人を惨殺するに至った経過を説明し、最高学府において学んだ者であっても、人間としての信念と品性において根本的に欠落していたものがあったことを指摘している。これは、当時の出来事であったが、ロッキードやＫＤＤなどの事件が相ついで起きている、昨今の日本の社会にてらして考えてみても、きわめて示唆のある指摘である。

内ケ崎は、対策として、つぎの諸点をあげている。体育を強化すること、ピストル、拳銃などによる刃傷害の防止、官紀振粛と米価安定の要、功利的結婚を批判し（内ケ崎はこれを「結婚の唯物化」と表現した）、こうした社会の常識を逸した犯罪がおきたことについては、国民一人ひとりに責任のあることを反省し、とりわけ宗教者は、基督の精神を人々の心の中に発揮させるように心掛くべきことを力説している（同上、八ページ）。

新大学令の批判

内ケ崎は文明改造の第一歩として重要なことは、宗教の発達と純化であるとし、いかなる国民であっても、その人生観、宇宙観を確立することが必要であるといっている。そして、文明改造の第二歩として、教育の改造が急務であるといっている。彼は大正八年二月に刊行された『六合雑誌』（四五七号）において、「新大学令の批判」を行っている。当時は、第一次大戦が終りをつげ、不評判であった寺内内閣のあとをついで、平民的な原内閣となり、民本主義が抬頭してきた時代であった。こうしたときに、原内閣は、大学令、および高等学校令を発布した。これは、大正七年一二月、教育調査会の決議を枢密院において審議し、勅令として発布したものであった。ついで、政府は、高等教

育の拡張を計画し、大正一四年には、約二万人の学生を収容するために、新たに、高等学校一〇校、実業学校一七校専門学校二校を増設することを決定し、それらに要する費用として、建設拡張費、三、九五〇万円、教官養成費四五〇余円、合計四、四〇〇余万円を計上し、大正八年以降同一三年に至る六カ年の継続費とする計画であることを伝えている。内ケ崎は、これらの計画を歓迎しながらも、これらの計画にたって、校舎が建設されても、精神の充満したすぐれた教師が養成されないならば、教育の実をあげることはむずかしいであろうとのべている。「校舎の新築か新生命の鼓吹か」（四五七号、五ページ）というのが彼の主張である。

大学令はその第一条において、「大学は国家須要の学術の理論および応用を教授し、その蘊奥を講究するを以て目的とし、兼ねて人格の陶冶及び国家思想の涵養に留意すべきものとす。」と大学の目的を規定し、これが、昭和二二（一九四七）年学校教育法の公布によって廃止されるまで、わが国の大学の性格を決定づけていたものであったことは承知の通りである。

内ケ崎はこの大学令に規定されている大学の目的に対して、つぎのような批判をなしている。

> 大学は国民の最高学府なるが故に、国家に必要なる学術の理論及び応用を教授するは当然のことである。又人格の陶冶も高等教育に於ては決して無視すべき筈はない。然れども事々しく、国家思想の涵養にのみ重きを置くは如何なる理由であるか。大学は既に国家の力に依つて支えられるならば、国家に対して、忠誠を尽すは当然のことである。然れども、之を改めて定義の中に加ふる必要ありや否や。（四五七号、六ページ）

こうした問いを自ら発したのち、それに対し、内ケ崎は自答し、大学はたしかに国家に立脚するが、しかも、国際的、人道的理想を抱擁せねばならないと主張している。彼によるならば、大学の使命は真理の探究にあり、そのため

に教授の自由と、研究の自由が保証されねばならないとし、「真理は自由である。自由のなきところに真理はない。学者は真理の研究者である。自由の与えられざる所には真の学者が存することは出来ない」とのべている（同上、七ページ）ここから、大学が国家目的の手段となるのではなく、国家という集団を超えた普遍的な真理を探求し、世界人道の進展に寄与するものであることを説いている。

内ケ崎の大学論において興味深いことは、大学は国際的性格をもつべきであるという主張である。彼は、欧米の諸大学が、外国からの留学生をすすんで迎え、自国の利益をこえて、人類全体の進歩のために貢献してきていることをのべ、日本の諸大学はむしろアジアの諸国の学生たちを迎えて真理の探求をなすべきところで国家思想と国家目的にとらわれているなら、かれらは日本の大学に失望をせざるを得ないであろうとのべ、大学の定義をこうのべている。

大学は国家人類に須要なる学術の理論及び応用を教授し、並びにその蘊奥を攻究するを以て目的とし、兼ねて人格の陶冶、国家思想及び人道の理想の涵養に留意すべきものとす。（四五七号、八ページ）

新大学が公布されたとき、世の大勢は之を歓迎し、国家に有為な人材が大学から輩出されることを望んでいたのに対し、内ケ崎は国家目的に拘束された大学が、普遍的な真生の探求を自由になし得ないということを説き、さらに、大学の国際的な在り方に障害となることをいち早く指摘したことは、のちの歴史的な過程からみるとすぐれた慧眼であったということが出来る。

私立大学の保護

内ケ崎は大学令の批判において、政府は私立大学の保護をすべきことをといている。これは、政府が、私立大学に

対して、大学を設立し、維持するに足る基本的財産を条件づけているのに対し、むしろ政府は、私立大学の高等教育に対する多大の貢献を認め、政府の方から無条件の奨励金を私立大学になすべきことを主張している。

一体政府は規則を以て民間の事業を束縛、制限するそれを能事と考えるが如きは、時勢遅れの思想と言はざるを得ない。かゝる場合に於ては宜しく政府は何等かの奨励法を講ずることは至当ではないか、例へば、仮に私立大学の供託すべき基金を一百万円として、政府は、それに対する利子と等しき金額を補助すると云ふが如き、奨励法を設くるが至当ではないか。（同上）

内ケ崎はここで、私立大学の事業は、国民の高等教育に寄与するところ大なるものであるので、国家は財的に援助すべきことを主張している。今日では、私立大学に対する国庫からの助成金として論じられているが、大学令が公布されて間もなくこのことをいち早く論じていることは注目に価する。

婦人問題

明治四二（一九〇九）年から大正一〇（一九二一）年にかけて内ケ崎が『六合雑誌』に寄せた数多くの論文のなかにみられる傾向の一つは、前半においては宗教思想や芸術論を扱ったものが多く、後半において、教育論と国際平和を論じたものが多いことである。これは、大正七年に第一次大戦が終結したことによって、世界平和の課題が取りあげられたことと、上述のように大学令の公布にともなって教育問題が論ぜられるようになったからであると思われる。婦人問題が主として出てくるのは、右の期間でいうなら、中期に多い。婦人問題に関連して内ケ崎の論文のテーマと掲載された『六合雑誌』の号数と年月を記すと左のようになる。

「婦人問題に対する吾人の態度」（三九〇号、大正二年七月）

「生命の源、文化の泉」（三九〇号、大正二年七月）
「大思想家の婦人観」（三九〇号、大正二年七月）
「耶蘇と保羅の女性観」（三九一号、大正二年八月）
「大思想家の婦人観」（続）（三九一号、大正二年八月）
「健全なる新婦人の先駆者」（原口鶴子葬式説教）（四一八号、大正四年四月）
「文明改造と女子高教育」（四五八号、大正八年四月）

『六合雑誌』は第三九〇号と第三九一号に婦人問題の特輯をなし、内ケ崎は「婦人問題に対する吾人の態度」という巻頭文を書いている。大正のはじめにおいて、「新しい女」ということがよく言われていた。これに対して、内ケ崎は新しい流行を追うようにして新しい女を考えるのではなく、もっと慎重にそして根本的に婦人問題を考究すべきことを主張している。そうした視点に立って同じ特輯号に内ケ崎は「生命の源、文化の泉」（三九〇号、大正二年七月）という一文を寄せて婦人問題を論じている。彼はその中で、婦人を「人類に対する生命の賦与者」としてとらえ、この点において婦人は男子が到底及ぶことの出来ない貢献を有していると主張している。

人類に対する生命の賦与者は誰であるか。いふまでもなく、婦人そのものである、こゝに婦人問題第一の鍵鑰がある。婦人問題が真面目な問題である所以はこゝに存するのである。今や全界を掩はんとする婦人の覚醒と、その運動とに対して、是非を言ふものがあらば、婦人問題解決の第一歩は生命賦与者としての婦人の立ち場から出立しなければならぬ。（三九〇号、三九ページ）

ついで、内ケ崎は人類の古代の文化史を辿っていかに婦人が、原始社会の文化形成に大きな貢献をなしたかについてのべている。食物の準備、火の管理、出産、育児、種族の伝説の口伝、風俗、習慣の継承、織物、染色をはじめ、土器、網、篭、筵などの作成、さらに病人の看護、家畜の育成など婦人の貢献の少なくなかったことをあげ、母たる

婦人が、生命の源であるのみでなく、社会の構成員として婦人が文化の泉であったことを指摘している。

しかし、時代を経るにしたがって文明史上における婦人の貢献は消極的な評価しか受けないようになり、婦人の才能は充分に発揮されずに現代に至ったと内ケ崎は解する。それ故に、婦人の教育を推進し、自覚ある婦人を輩出し、婦人の地位の向上をはかることが肝要であるというのが彼の主張である。こうした観点から、彼は当時いわれていた「新しい婦人」と「覚醒した婦人」を区別している。「我が尽なるが為めに自由を慾求し、放縦なる生活を営むことを以て理想とするが如きは決して覚醒したる婦人のなすべき所ではない。かゝる婦人は何れの時代にも存在したる厄介者である。何等新しき婦人ではない。真に新しき婦人は新しき理想に燃ゆる所の婦人でなければならぬ。」（同上、四五ページ）とのべている。

さきに触れた内ケ崎の「新大学令の批判」においても、内ケ崎は「女子高等教育の閑却」についてのべ、「現内閣が男子の教育にのみ重きを置いて、女子教育を軽んじたる態度を非難せざるを得ない」（四五七号、九ページ）といって女子の高等教育の拡充を訴えている。

さらに、翌月（大正八年四月）の『六合雑誌』（四五九号）において「文明改造と女子高等教育」と題する一文を発表し、女子高等教育に対する彼の積極的な所見をのべている。この論文は、四章から成り、㈠はじめに「女子高等教育の恩人成瀬仁蔵の功績」を論じ、同年三月四日、目白台の日本女子大学内で永眠した成瀬の生涯を顧み、女子教育に対する功績を記録している。なお『六合雑誌』は成瀬の死を悼んで四五九号に「女子高等教育の必要」という成瀬仁蔵の遺稿を掲載している。内ケ崎は前記の論文で、成瀬が周防国吉敷に生れ、その父は山口藩士で、父の門弟の一人が沢山保羅であったことをのべ、その沢山の感化をうけて成瀬もキリスト者となり、沢山をたすけて梅花女学校の

創業に尽力し、新潟の伝道にあたりつつ新潟女学校の創立をはかり、ついで、五年の米国における留学ののち、一時梅花につとめたが、のち日本女子大学を開校するに至った経過を記している。また、成瀬は帰一協会のメンバーであり、帰一協会における成瀬は、「女子教育家としてよりも寧ろ志士的思想家であつた」(同上、二ページ)とのべ、成瀬が帰一協会の熱心な唱道者であったことを記している。(二)ついで「欧米に於ける女子高等教育の発達史」をのべ、古代から中世、文芸復興期における女子教育にふれ、さらに、近代における英、米、独、仏などの女子高等教育の状況を克明に記し、(三)現代における「婦人職業増加」の趨勢を数字であげて説明し、(四)おわりに、「明治、大正の女子高等教育」を回顧し、これからの問題を展望し「日本国民の大事業の中、女子高等教育に最も大なるものゝ一つである。」(一二ページ)と結んでいる。

国際平和論

内ケ崎が『六合雑誌』に連続して寄稿した期間は、彼の外遊後、すなわち明治四四年一〇月(三六九号)から大正一〇年二月(四八一号)に及ぶ期間である。この間、大正三年から七年にかけて第一次大戦があり、世界は戦乱の雲に蔽われ、わが国も参戦した。そのあと国際連盟をはじめ世界平和への関心が高まって来た時代であった。この時代の課題を反映して、内ケ崎の国際関係の論文は、つぎの三つのものに分けられる。

(一)、第一次大戦の初期のもの

「バルカン戦争の文明史的意義」(三八五号、大正二年二月)、「大戦乱と文明」(四〇四号、大正三年九月)、「カイゼルの政策と独逸の文化」(四〇五号、大正三年一〇月)、「平和の哲理」(四〇六号、大正三年一一月)、「白耳義国民を慰む」(四〇六号、大正三年

一一月)、「近代独逸の思想的背景」(四〇七号、大正三年一二月)

(二)、第一次大戦末期、もしくは直後に書れたもの

「文明審判者としての戦争」(四四四号、大正七年一月)、「調和融合の道」(同上)、「欧洲大戦乱の終局に際して」(四五五号、大正七年一二月)、「文明改造の第一歩」(四五六号、大正八年一月)、「国際的日本の位置と人種問題」(四六〇号、大正八年五月)「再び国際連盟を論じて日本の文化の特質に及ぶ」(四六一号、大正八年六月)、「平和来と世界的不安」(四六三号、大正八年八月)「改造か再生か、世界改造期における日本の立場を論ず」(四六六号、大正八年一一月)

(三)、その他のもの

「文明史眼に映ずる加州排日問題」(三八九号、大正二年六月)、『日米問題号』発刊について」(四一一号、大正四年四月)、「国交の基礎を論ず」(同上)、「国家主義と国際主義の統一」(四一六号、大正四年九月)、「羅馬東京間大飛行の文化的意義」(四六八号、大正九年一月)

右のなかから、内ケ崎の考えを紹介してみよう。先ず、第一次大戦の当初において、彼はその戦争の原因をつぎのようにのべている。

今や独逸帝国は露西亜に仏蘭西に又英国に向って宣戦し、ルクセンブルグ公国の中立帯を犯し、併せて白耳義を横断して仏蘭西国境に肉薄せんとして居る。欧州の風雲之より大に動いて数百万の軍隊と、数百万屯の海軍と相撃ち相戦って、世界未曽有の惨事を実現せんとして居るのである。そしてこれが原因は、一二の君主及国民の野望に外ならないのである。大義名分の存在せざる戦争である。国民生活の必要と、或は止むを得ざる事情はありとするも、幾十万人の血を流してまでも贖はざる可からざる理由はない。之を要するに此の度の戦乱は私利私慾の戦争に外ならないのである。(「大戦乱と文明」五ページ)

内ケ崎は、ヨーロッパの各国が「汝の敵を愛すべし」というキリストの言葉を信奉するキリスト教の背景をもつ国

々であるにも拘らず、互いに相争っていることは、それらの国々のキリスト教が機械的又は官僚的基督教となり、真正のキリスト教から離れているが為であるとしている。

日本が、大正三年八月二三日にドイツに対して宣戦布告をなし、参戦するに至り、内ケ崎は、「カイゼルの政策とドイツの文化」なる一文を草し、『六合雑誌』（四〇五号、大正三年一〇月）に寄せている。彼は、ドイツ皇帝の政策とドイツ国民の文化とを区別する必要をとくと共に、ドイツ皇帝が権力を集中して戦争にふみ切ったことには、それなりの理由と歴史的背景のあることを解説している。もちろん、内ケ崎は、ドイツの拡張的侵略主義に反対の意見を表明している。

独逸はフレデリック大王以来侵略を継承した。大王曰く、先づ征服せよ。理屈はどうにもつくものであると。此度独逸軍のルクセンブルグ及び白耳義の中立国を侵したる、寔に此方針を実行したのである。而も独逸人が無益の殺生を事とし、古都を焼き、婦女子を虐待して、文明の賊たるの誹謗を免がれない。独逸人に全く軍国主義のためかく迄にその高遠なる理想主義を俗化せしめたるを思へば吾人は実に慨嘆せざるを得ないのである。（同上、七ページ）

内ケ崎はこの戦争においてドイツが敗北を喫することを予想し、それは、ドイツの軍閥のためには悲しむべきことであるが、ドイツ国民にとってはむしろ祝すべきことであるとのべている。

第一次大戦勃発後間もなく、内ケ崎は右の論文のほかに、「近代独逸の思想的背景」（四〇七号、大正三年一二月）を『六合雑誌』に掲載している。ここでも、近世において、ヨーロッパの列強がドイツに対してとった抑制、対抗の政策を、フランス、オーストリア、ロシア、英国の立場からそれぞれ分析し、「此の度の欧州大戦争は何れも民族的必要より惹起せられたのである。国民的慾望の衝突である」（同上、六ページ）と説明し、ドイツが敢えて戦争をおこした

思想との背景として、フリードリッヒ・ニーチェの思想があるとする意見について、つぎのようにのべている。

ニイチェは権力意志を高調した。超人道徳を力説した。奴隷の道徳を排斥して強者の道徳を奨励した。彼の文章には剣戟の響がある。これを読んで快哉を叫ばないものはない。彼は愛と奉仕の基督教道徳を罵倒して、権威の道徳を揚言した。されども、彼は猛烈なる個人主義者にして、軍国主義官僚主義には絶対に反抗を試みた。（同上、七ページ）

ここで、内ケ崎は、たしかにニーチェのなかには、権力への意志があったけれども、彼自身は、個人的内的自由を大切にした思想家で、全体主義的な軍国主義とは異なっていたことを指摘し、ニーチェは自らをスラヴ人であると称し、独逸人でないことを誇りとしたことをあげ、ドイツ人のなかにニーチェに対する誤解のあったことを記している（同上、七―八ページ）。

戦争が終り、国際平和への機運が高まり、日本の国際社会への貢献が期待されるに至ると、先に掲げたように、内ケ崎は一連の国際問題についての論文を寄稿している。かれは、この戦争から学ぶべき教訓とし、㈠国際的関係を一層に緊密にすること、㈡一国の利害を至上視するのではなく、国際的道徳がとかれるべきこと、㈢その目的のために世界各国における教育が刷新されるべきこと、㈣社会的改造が急速になされるべきことなどをあげている（平和来と世界的不安」四六三号、大正八年八月）。日本の課題としては、米価問題など経済的な問題もあるけれども、最大の課題は朝鮮問題であるとし、「朝鮮における武断政治の汚名を濯ぐに非ざれば、日本はやがて国際的孤立に陥る場合があるかも知れない」（同上）と警告している。

第一次大戦後、国際連盟成立の機運がおこり人びとは国際平和への関心を強くしていった。内ケ崎は、国際連盟の成立を歓迎しながらも、その規約に明文化されていない重要な問題としてつぎの四つをあげている。㈠人種差別撤

廃、㈡信仰布教の自由、㈢海洋の自由、㈣関税の撤廃と自由貿易、㈤門戸開放、機会均等である（四六一号、三ページ）。内ケ崎は、パリで開かれた講和会議において、日本の委員の提出した人種差別撤廃案が否決されたことを大きくとりあげ、自由と正義を標傍してウィルソン大統領が国際連盟をおこそうと努力しているが、人種差別を内包する限り、国際連盟は英米専横のそしりを免れ得ず、さして期待することは出来ないとしている。彼は、人類の永い歴史を省み、人間の間に差別と不平等が形成されていったことを指摘し、これからの人類の共同の課題がここにあることを指摘している。同時に、わが国は、外に朝鮮問題、内に被差別部落の問題を有し、自ら反省してあたるべきことを勧めている（四六〇号、七ページ）。

国際関係を扱った内ケ崎の多くの論文のなかで興味深いものに「羅馬東京間大飛行の文化的意義」（四七八号、大正九年一一月）がある。

これは、羅馬東京間の大飛行がイタリアの詩人ダマンチオの指導の下に行われるという報道に接して書かれたものである。内ケ崎は、この企ては、ペルリの黒船が明治文明のさきがけとなったように、まさに来らんとする新しい文明の暁の鐘を鳴らすものであるとして評価している。彼は、歴史的に日本とイタリアの関係を省み、二つの出来事をあげている。一つは、イタリア人マルコ・ポーロの東洋旅行である。彼はヴェニスの商人であり、父および、伯父と共に一二七一年中央アジア大陸を渡って北京に来り、十数年中国に滞在し、一二九五年、二四年目に故国に帰った。帰って間もなくヴェニスとゼノアの戦争がおこり、彼は捕えられて獄に入れられた。有名なマルコ・ポーロの旅行記は獄中で口授筆記されたものである。その中で中国の東にジッパングという国があり、それは黄金の国であるとして日本のことが報じられている。マルコ・ポーロについて、イタリアと日本とを結んだ歴史的関係として、天正一〇年

一月、九州の大友宗麟、大村純忠、有馬晴信がキリスト教を信奉し、救済と貿易通商を求めて伊藤義賀、千々岩清左衛門の二名を正使とし、中浦、原の二名を副使としてローマに派遣したことを記述している。さらに、日伊関係の第三段階として、伊達正宗と支倉六衛門常長の訪伊旅行を詳細に記述している。支倉常長のローマ行は、六八名の随員をしたがえて、領内の大木を伐り集めて建造した横五間半、長さ一八間の大船によって、まず、ノベスパニヤ（メキシコ）に五カ月かかって渡り、そこで随員たちは洗礼をうけ、数カ月の滞在ののちに翌慶長一九年八月スペインに着くという大規模のものであった。ローマ教皇には、その年の一一月に竭見し、メキシコ、マニラなどを経て、元和六年八月、八年振りに月の浦に帰りついている。当時の将軍徳川秀忠は、キリスト教徒を迫害していたので、支倉ら以下の使節が帰りつくと、改宗を迫り、熱血漢支倉六右衛門常長は元和八年七月一日、五二歳を一期として此の世を去り、仙台市北山の光明寺に彼の屍が埋められていることが記されている（同上、二〇ページ）。

なお、支倉常長については、遠藤周作が長編小説『待』（一九八〇年四月刊）で主人公長谷倉六右衛門としてとりあげている。仙台で育ち学んだ内ケ崎は、とりわけ常長にひかれたことと思うが、東京―ローマの飛行計画にあたってとりわけ常長のことを想起し詳述しているのは興味深いことである。

仙台の友人たち

内ケ崎の仙台時代の友人として、吉野作造、小山東助、栗原基、小西重直、箭内互、大島六郎、島地雷夢などがあった。

このうち島地雷夢は、本願寺の有名な指導者島地黙雷の息子で、ともに二高時代、尚絅女学校長ブゼル宣教師の聖

書研究会に毎週出席して学んでいた。これは、栗原基の勧誘によるものであった。島地も、内ケ崎も尚志会雑誌部の委員をつとめ親交を深めた。明治三一（一八九八）年七月三日ブゼル宣教師の熱心なすすめによって、内ケ崎、島地とあとから加った吉野作造の三人は、牧師中島力三郎から北一番丁の浸礼教会で試問をうけて、受洗している。（「二高時代の島地雷夢君の追懐」四一九号、一一九―一二〇ページ）やがて島地は東京に転じ、姉崎正治や井上哲治郎などの薫陶をうけ、将来を嘱目されていたが、大正四（一九一五）年にチフスのために急逝した。内ケ崎は、友人を偲んでつぎのように詠っている。

廣瀬川流れ冴えゆく真夜中に信を談ぜし昔なづかし　朝霧に睡れる市を見下して共に祈りし古杉の蔭　釈迦堂の夏の夜ふけて雲の中に君みし物は何の啓示ぞ　亡き君の歌の香のみぞ身に逼る菊うら枯れし晩秋の宵　蜂章白筋帽のあみだ振り光るまなざし今もちらつく（大正四年一一月二一日作）

内ケ崎が『六合雑誌』上で哀惜のおもいをもって追想しているもう一人の仙台時代の友人は小山東助である。内ケ崎は、明治一〇年生れ、吉野は一一年、小山は一二年生れで、三人はきわめて親しい間柄にあった。三人の特色を彼はこう記している。

小山君は海の人、吉野君は平原の人であります。私は山の人であります。天下の大勢を見ることを一番暢気にやっているのが我輩で、山の人間はどうしてもさうならざるを得ないのであります。古い町は町人の都会で、仙台藩の武士の勢力の極めて少なかった所でありまして、御郡奉行と云ふものが治めて居ったのである。仙台の方では、士族のことを旦方と申しますが、旦方の勢力が甚だ少なかった所、否皆無な所であります。そこで昔から古川はデモクラテツクな所であります。其処より吉野君が現はれたと云ふことは偶然でないと思うのであります。所が小山君は帝国大学の学生時代より天下の大勢は注意されたのであります。それは一つは矢張港で始終船の出入を見て居る所から、晩翠の弔詩の中にありました通り、謂はば海一つ隔てゝ亜米利加に対して居ると云

ふやうな所でありますから、余程世の中の見方が早く発達して居つたろうと思うのであります。小山君は極めて多方面の人である。其性格も極めて複雑な人であつた。（四六七号、二ページ）

小山は、二高を卒業し、東大に学び、新聞記者となり、代議士として二回当選して活躍していたが、大正八年八月二五日、四〇歳の生涯を終えた。彼を追悼し『六合雑誌』は第四六五号、第四六七号に特輯をなし、その生涯と思想を偲んでいるが、内ケ崎は両号に寄稿（「小山東助君の追悼」四六五号、「小山鼎浦の宗教思想」四六七号）している。

このように、内ケ崎作三郎の『六合雑誌』への寄稿はきわめて多岐にわたっているが、一貫した姿勢をもって貫かれている。それは、英文学者としての豊かな情緒をもって世界の文明思想史を該博な思想をもって語り、近代の宗教思想に豊かな造詣をもって、自由基督教の代弁者にふさわしい健筆をふるっていた。また時代の趨勢を的確にとらえ、女子教育、人種問題、国際平和、学制改革などの諸問題に適切な警告や示唆ある発言をしている。さらに、仙台の二高時代からの親しい交友を大切にし、各地の教友を訪ねては和歌に心情を託して『六合雑誌』に寄稿するなど、彼の宗教美術への関心とともに、豊かな芸術的素養をそなえたものとして評価することが出来よう。現実を直視ししつつも、内ケ崎の中には、生命の働きに対する楽観的な見方が強く、現実の醜さと破れを否定的媒介としてとらえ直すという批判的な側面は失われていないまでも稀薄であった。まさにそこに自由基督教の特色と限界があったということが出来よう。